

ばってん

事務長会報第58号

令和7年12月1日

長崎県公立学校事務長会
長崎県立長崎西高等学校内

〒852-8014
長崎市竹の久保町12-9
電話 (095) 861-4770

秋の実り

佐世保西高等学校 豊村 治郎 (副会長)

今年度、事務長会副会長を拝命いたしました佐世保西高校 豊村です。事務長会副会長を務まるのか不安ですが、冨田会長さんをはじめ役員皆さんの指導を仰ぎながら精進してまいりたいと思います。私は平成3年に採用されて35年目を迎えます。小値賀小学校に始まり小学校を2校、今は無き佐世保教育事務所から県立学校へとお世話になっています。普通校、工業・農業高校、特別支援学校と経験はしましたが、失敗も数多く（今もですが）ありました。もう退職という文字が日々近づいてきているのだと、諸先輩方が事務長会を退会されていくのを見ながら痛感しているところです。事務長会に入ったのは、平成29年4月佐世保特別支援学校で内示を受けてからでした。当時の西岡校長先生から「大崎高校です。」と言われ、小原さん（現：県教育センター）の後任と思っていたら、「事務長です。」と追加され「えー！」と驚いたものでした。さらに当時の岡田事務長さんからは「役職が人を育てる。」と達筆で書いた手紙（メモ？）をいただいたのを覚えています。あれから事務長として4校9年目を迎えています。岡田事務長さん言う「成長」できたかはわかりません。

佐世保西高校に来て早いもので半年が経過しました。10月も中旬（掲載するところには涼しい？）だということに、エアコンが必要な日々、短い秋になるのでしょうか。

今後自分の子供たちが同じ年齢になるころにはどうなってしまうのだろうと見当もつきません。

一日一日を大事にしないといけないと考えていますが、朝学校に来て、管理職打合せ、職員朝会、事務室打合、自分の担当業務等、あつと言う間に午前中が終わり、午後は惰性で夕方まで転がっています。夕方には「もう一日終わってしまった。」と思い、今日何をした？と思い返しても大

したことはしていない。でも無駄なことはしていないと自分に言い聞かせる毎日です。

本校は、令和6年創立60周年を迎えました。校訓は「自主自律 積極敢為 親和協調」赴任した時、最初は読めませんでしたが、2番目の読みは「せつきょくかんい」、物事に対して自分から進んで取り組み、困難を恐れず、物事をやり遂げるという意味です。学校は、生徒会の活動も活発で大変明るいイメージの学校です。

私的な話になりますが、秋になると親類の家で稲刈りが始まります。収穫（コンバイン）した米をトラックで運搬、例年それが私の担当です。年間の作業では、田働き→田植え→管理（水管理・薬かけ等）→稲刈り→乾燥→粳摺り→精米の一連の作業があり、今ではドローンなど機械化も進んでいるようです。稲は乾燥させ野菜などが乾燥しないように畑に並べ利用します。こういう作業をしているとご飯は一粒も残さず食べるようになります。昨今の全く値下がりの兆しがないお米、高止まりが続き、困りますね。稲刈りが終わるとミカン取りが始まります。極早生から晩生まで年内作業が続き、値段の高い年末までに選果してすべて年内出荷しているようです。10月はいいのですが、12月に入ると早朝と夕方の冷え込みは厳しく、手と足の指先は冷たくなり体も冷えます。日が暮れるのも早く5時には暗くなり始め、帰ってすぐにお風呂に浸かります。自然を相手にする作業は大変ですね。私たちは事務室でエアコンと暖房の効いた部屋で「ありがたい」ことです。工事関係者や作業をされる方には頭が下がります。

とりとめのない話に終始しましたが、「積極敢為」を胸に生徒の為に取り組みたいと思います。ありがとうございました。



面白きこともなき世に面白く

長崎東中学校・高等学校 松崎 耕士

お題の句は、高杉晋作の辞世の句です。満 27 歳の若さでこの世を去った彼のこの句には、面白くもない世の中にあっても、やりきったという自負と感慨を感じます。続く下の句は「すみなすものは心なりけり」と野村望東尼がつけました。『面白くもない世の中にあっても、面白く生きるかどうかは、結局のところ自分の心持ちひとつ』ということですね。この句は、ポジティブ思考であれば、物事が楽しく、面白く転換できるという、励ましの句とも言えます。今後の生活をまだ描けていない私。これからの生活で重視したいのが向上心です。どう生きたいか、どのような生活を送りたいか、何を楽しんでいくのか。これらの実現を目指せば、おのずと充実した日々を過ごすことができると思うのです。

また、この句からは、幕末の混乱期、その状況を嘆くのではなく、自ら変革の旗振り役となることを選択した、彼の生き様も伝わります。『動けば雷電の如し、発すれば風

雨の如し』と評された彼は、従来の常識を打ち破る行動力と先見性を持って、明治維新の礎を築きました。少しだけ格好つけて書かせていただきますと、私たちは人生という旅を続けています。彼は、わずか 27 年間、激動の時代を全力で駆け抜ける旅をしました。偉人の旅と私の旅を並べること自体、身の程知らずで、おこがましいのですが、彼の 2 倍以上の旅をしている私は、大学卒業時にはバブル最盛期で、就職先に公務員という選択肢は毛頭ありませんでした。が、バブル崩壊後この職に就き、34 年間で延べ 15 所属での勤務。振り返ると、どこか目的地を定めずに、気づいたらここに至ったという旅です。司馬文学では、高杉晋作の旅は望東尼の下の句に「面白いのう」と微笑んで終わります。

皆さんも私も旅はまだまだ続きます。面白く旅をしましょう。お元気で。



「春」 ※仕事とは全然関係ないです…

長崎南高等学校 宮原しおり

昭和 19 年生まれ 81 歳。4 人姉妹の長女であり、姉妹の父は職業が刑務官で公私ともに厳しい人だった。と聞くとしっかり者で真面目な長女を想像するところだが、子供のころから誰よりも自由奔放で 3 人の妹は姉が父親から怒られている姿を見てそれはそれは怖すぎて決して父親に口答えなどしなかったらしい。それでも変わらず怒られ続ける（妹からの弁）のが、私の母である。

私が小学校高学年頃（反抗期の始まり！）、母とケンカになり本気で追いかけてまわされ裸足のまま縁側から脱走したことも。楽天的で人情味あふれ感情の人、反面几帳面で細かいことにうるさく時にケンカすることがあっても、裏表のない本気の母で基本とてもいい関係であった。はずなのに、私が 21 歳の頃だったか、母は「自分は若くから子育てや家のことばかりで自分のしたいことも出来なかった云々」と言い、祖父母、妹たちを怒らせ呆れさせ、私を面

前に何を言うのかとあの楽しい毎日は何だったのかと、怒り以上に悲しみばかりであった。それから勘当状態になった母（遅く一人で生きていたようだ）。祖父母たちの怒りも収まったのか、母も大切なことに気付いたのか、6 年程たった春の日いつものように母が実家で笑っていた。あんなに悲しかったのに怒っていたのに私も一緒に笑っていた。時間は多くを教えてくれるし救ってくれる。少し大人になった私はちょっとだけあの頃の母の気持ちもわかる気がする、決して母には言わないが。

いろいろあったが年を重ね穏やかさを身に纏った母。だが、この間従妹から私に密告があった。庭で花に水やりをする母に「おばちゃん、花育てるの上手よね、好きと？」と従妹、母は「そうよー。だって花は口答えせんやろ、あはは」だと。

母よ。お楽しみのところ申し訳ないが、春になったら口答えする娘との生活が始まります。覚悟しておきなさい。

追：この場を借りてお世話になった事務長会みなさまに、「ありがとうございました」。

新任事務長として「まさか・・・」

上対馬高等学校 阿南 直也

今年の内示で、上対馬高校に事務長として異動ですと校長先生に言われ、「えっ」てなったことを今でも鮮明に覚えている。離島勤務は、奈留高校以来 2 回目になった。3 月 30 日博多港から厳原港までフェリーで 4 時間、厳原港から上対馬高校職員住宅まで 75.4km、車で 2 時間 30 分ばかりとにかく遠い。携帯の電波は、圏外がほとんど何かあった時の通報は、どうやって行うのか疑問だらけの毎日。住めば都という言葉があるが、まだ私にその実感は訪れていない。そろそろ本題に入ります。

上対馬高校にまさかの事務長として着任しました。肩書きは立派ですが、中身はまだまだ新人。日々「これって自分の仕事？」とつぶやきながら奮闘しております。

着任初日から、机の引き出しに大量のカギと謎の書類の山。どのカギがどこに合うのか分からず、まるでリアル脱出ゲームのようなスタートでした。コピー機が止まれば「事務長～助けて！」、蛍光灯が切れれば「脚立ありますか？」



と呼ばれる始末。気づけば事務室は「修理屋兼なんでも相談所」と化しております。ただ不思議なもので、慌ただし日々の中で、生徒たちの「ありがとう」の一言や、先生方のホッとした顔を見ると、「ああ、事務長の仕事もなかなか悪くないな」と少し思えてきます。数字や書類に追われつつも、人に支え、人を支える仕事なんだと実感しているところです。こうして同じ立場の皆さまに読んでいただ

ける場があるのは本当にありがたいことです。「ああ、自分も最初はそうだったな」と笑っていただければ幸いですし、「それは違うぞ」とツッコミを入れていただければ、なお勉強になります。

これからも事務長ライフの迷走(?)を楽しみつつ、一歩ずつ成長できたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

すべては子どもたちのために

沓岐商業高等学校 川端 裕也

初めて降り立った印通寺港は想像を遥かに超える喧騒も喧騒…思わず、「あれ??」

新たな仲間を迎える数々の幟や手作りのボード、折り返しの船で島を離れる者(先生かしら?)への惜別と感謝が込められた大量の紙テープを持った子どもたち。なによりいたるところに掲げられた「甲子園出場おめでとう!」「感動をありがとう!」といった横断幕やポスターの彩りに、つい105分前に深い溜息を吐きながら唐津港を発った時の暗澹たる気分は雲散。「なんかいいかも…」という思いでスタートした沓岐市での生活はあっという間に秋の入り口にさしかかっているところです。

着任早々の人事関係の手続きや式典での来賓対応に始まり、慣れない業務に手こずりながらも「失敗したとて、そんな私を選んだヤツが悪い」と一応は開き直って過ごす毎日ですが、それでも挫けそうになった時の拠り所としているのがタイトルに表した13文字の言葉。

実はこれ長崎県ラグビー協会のスローガンであり、かれこれ15年以上も女子ラグビークラブの普及・育成に携わってきた私自身も大切にしている指導理念なのですが、『学

校で働く』ということの意味も須らくそこに集約されていると思えばこそしんどい仕事も頑張れているのかなと思っています。

全日制、夜間定時制の普通科高校に工業、農業、特別支援学校、そして現在の商業高校(生徒数168名)と様々な校種の生徒たちを見てきましたが、いずれも将来への希望に満ちたキラキラした子どもたちばかり。この子たちが喜んでくれる姿を励みとして勤しんできたことがこれまでの自分の成長の糧であったし、これから先も支えとなってくれることだと信じて、魅力いっぱいこの島で、いまだ慣れない仕事にしっかりと向き合っていきますので皆さんどうぞよろしくお願いいたします。

P.S. ラグビーに興味のある子が周囲にいらっしやれば、いつでもご連絡ください。



宇久に赴任して

宇久高等学校 松本 友紀

4月に事務長として赴任してきました。20年ほど前に、小値賀の北松西高校に勤務したことがあり、今度は宇久にしかも事務長として異動になるとは思いもよらず驚きました。小値賀では、夏には仕事が終わってから海に泳ぎに行ったり、夜には星空がきれいだったことを懐かしく思い出します。赴任して半年が経とうとしていますが、まだまだ慣れない仕事も多く、先生方や事務室のみなさんに助けてい

ただきながら日々過ごしています。

事務職員時代は、学校の行事等に参加して生徒の様子を見る機会はありませんで



大浜海水浴場(7月)

したので、事務長になり4月の入学式や5月の中高合同体育大会、ユビトマ企画などいろいろな行事等で生徒たちの活動の様子を間近で見ることができ、とても嬉しく思います。宇久高校は生徒13名のとても小さな学校ですが、どの行事でも生徒一人ひとりが一生懸命頑張っている姿が印象的です。生徒たちと向き合う先生方も活気にあふれ、一体感のある学校、みんなが主役になれる学校だなと感じます。令和8年度からは離島留学も始まります。学校の転換期に事務長として何ができるのか考え、教育環境充実のため尽力できればと思います。

仕事以外では、自然豊かな宇久島での生活を存分に楽しみたいと思っています。休みの日には島内の観光地や神社を巡っています。対馬瀬灯台では、地球って本当に丸いと感じたり、きれいな浜辺を散歩して癒されたり。先日は、初めてシーカヤックを体験し、どこまでも透明な宇久ブルーの海に感動しました。これからも宇久でしかできない経験や宇久の四季折々の自然を楽しみたいと思います。また、地域の行事等にも積極的に参加して、地域の方々との交流も大事にしたいと思っています。

まだまだ分からないことや判断に迷うことが多くありますが、1日1日を大切にしながら頑張っていきたいと思いますので、みなさまどうぞよろしくお願いいたします。

今から35年前、平成2年4月、私は大学を卒業し島原半島の小さな小学校に赴任した。田園風景が広がるのどかな学校で、運動会では老人会や青年団、保育園児も開会式から参加するような学校であった。

赴任したばかりの私は、右も左も分からず、日々の業務に追われていた。そんな私に、地域のお年寄りたちは気軽に声をかけてくれた。朝、校門で子どもたちを迎えていると、近所のおばあさんが「しえんしえい、最近はどうだね？」と笑顔で話しかけてくる。放課後、子供たちにソフトボールを教えていると、地域のお年寄りが孫を連れて楽しそうに見学に来る。時には、地域の集まりに誘われ、そのまま公民館でごちそうになることもあった。

また、当時は今でいう特別支援学級に在籍するような子どもたちも、同じ学級で一緒に学んでいた。学級の中には、学習や生活面で支援が必要な子どもも数名いたが、クラスメートたちは自然に手を差し伸べ、助け合いながら日々を過ごしていた。当然、日常的にトラブルも頻繁に起こっていた。それでも、保護者同士が近く、親しい関係にあったため、特に大きな問題ともならず解決できていた。

先日、卒業生たちの同窓会に招かれる機会があった。久しぶりに顔を合わせた教え子たちは、すでに立派なおじさん、おばさんになっていた。驚いたことに、当時支援が必要だった子供（今ではおじさんたち）もいっしょに参加しており、聞けば、今でも頻繁に同級生たちは顔を合わせているらしい。そして彼らの多くが自分の子どもを母校に通わせており、PTAの役員として学校運営に関わっている者もいるという。生活態度が良いという者ばかりではなく、それなりにやんちゃな者もいたが、それでも地域と学校のつながりが脈々と受け継がれていることを実感した。

このような経験を語ると、「昔はよかった」と懐かしんでいるように受け取られるかもしれないが、私は決して過去を美化したいわけではない。むしろ、今ではコンプライアンスに抵触するようなことも数多くあったし、個人情報の保護という意識は非常に低かった。しかし当時の地域と学校の関係性や、教師を支える風土の中に、現代の教員の働き方を考える上でのヒントがあるのではないかと感じている。大学を卒業したての新米教師が「しえんしえい、しえんしえい」と親しみを込めて呼ばれ、毎日楽しく学校で勤務できていたのは、学校が「地域」のものであったからだったと思う。そして、その雰囲気は当時の多くの学校にあり、

同じような経験をしてきた先生方は数多くいらっしゃるはずである。学校という場は、単に子どもたちを育てるだけでなく、教師自身もまた地域の一員として成長していく場所だった。あの頃の学校には、地域全体で子どもと教師を育てるという、ある種の熱気が確かに存在していた。それは、単なる義理や人情といった言葉では片付けられない、もっと根源的な共同体の営みだったように思う。

現代の学校現場は、社会の変化とともに多様化し、教員の業務も複雑化している。保護者や地域との関係も、かつてのような「顔の見える関係」から、やや距離のあるものへと変わりつつある。

今、改めて考えるべきなのは、教師が孤立せず、地域とつながりながら成長できる環境づくりではないかなと感じている。もちろん、時代が変わり、地域社会のあり方も変化している。しかし、地域の人々と教師が気軽に言葉を交わし、互いに支え合う関係性は、今の時代にも必要なものだと思う。

先日、本課の職員が選挙の投票率のデータを見ていて気付いたことがある。投票率が低い市町は「住みやすい街ランキング」の上位の市町と重なっていた。社会の出来事に関わりたくない、他人に干渉されたくないことが、いわゆる「住みやすい」という感覚は、分からないわけではない。距離を詰めた人付き合いとは、時としてわずらわしさを感じるものである。

本県の特別支援学校でもコミュニティスクールを検討する段階にきている。通学範囲が広い特別支援学校において、地域との結びつきをどのように構築していくかが今後の課題である。



編集後記

第58号を発行するにあたり、ご寄稿いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

早いもので令和7年が過ぎようとしています。本号は本来であれば昨年10月には発行すべきところでしたが、私の不徳の致すところにより発行がかなり遅くなってしまいました。

関係の皆様には多大なるご迷惑をお掛けし大変申し訳ございません。お詫び申し上げます。

人と人のつながりは非常に大切なものと改めて思う今日この頃です。これから起こる様々な問題に対応できるように、事務長会会員同士が今後更につながり合い高め合うようになっていければいいと思います。私自身はなるべく人の迷惑とならないよう身の丈に合った生き方をしたいと願う今日この頃です。とりとめのよい文章となってしまう。皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

M・H